

## 「森の貯金箱 再建住宅プロジェクト」とFSB工法

釜石地方森林組合 参事 高橋幸男

忘れもしない3年前、当地域を襲った東日本大震災津波は、尊い命と慣れ親しんだ街並みを奪い去り、住民を絶望の淵へと追いやった。

当組合も当時の代表理事組合長を含む5名もの尊い命が奪われ、事務所全壊・積上げたデータの流失という未曾有の大災害に見舞われた。そして無事を確認できた役職員の半数は、住宅全壊・半壊と避難所、仮設住宅での不自由な生活を余儀なくされた。

一時は「復旧など難しいのでは?」とも思ったが、全国各地から支援をいただき、何とか復旧に向けたスタートラインに立つことができた。市内、町内の復旧作業を最優先に森林整備(間伐)の早期再開に向け取組んでみたが、岩手県、宮城県沿岸部にある合板工場を含む6つの大型国産材工場が被災し、廃業または減産を余儀なくされたため、間伐から生産される木材は行き先を失い森林整備は停滞した。また、突然資産を失った被災者は再建に向けて莫大な資金が必要なため住宅の再建を諦めかけていた。

このような状況から住宅再建を望む地域住民と森林整備(間伐)が進まない被災地林業とを繋げる取組みが始まった。それは、建築材に向かないとされる合板工場向けの木材を活用するFSB(Forest Stock in Building)工法による被災者向け廉価版の住宅「森の貯金箱 再建住宅プロジェクト」のスタートであった。

FSB工法とは、東京の設計事務所、(株)結設計が提案した工法で、地元建設業者のリンデンバウム遠野が建築、岩手県森林組合連合会との連携により木材を歩留まり良く大量に活用することで林業の活性化をするとともに、建物が建替えや増改築で解体されても、廃棄

木材とせず、別の建築部材として使われ続けることを目的としている。構造的には合板用材の径級14cm~16cmの小径間伐材を10.5cm角に製材し加工・連結することで壁面パネルを制作し、そのパネル壁を連続させて建物を構成していくものである。また従来の木造住宅の約3倍の木材を使用するという極めて贅沢な造りであるが、5種類のパネル壁から構成されるFSB工法を用いることで、現場の人件費を低減し、被災者のニーズを踏まえて限りなく廉価に抑えることができた。そして価格のみならず、パネル壁を現し木目の美しさを際立たせ木が持っている蓄熱性能、調湿性能、断熱性能を活かした住まいとなっている。

そして、工期の短縮、人件費の削減のみならず、木材の使用量を増やすことで地域森林の適正管理と被災地の雇用の拡大に大きく寄与している。30坪1棟建設するには1haの間伐材が必要で、間伐に延べ30人、建設に同70人の雇用がうまれる。

現在、住宅の自力再建者からのご意見を頂戴しながら、平屋建て18坪から2階建て34坪までの全8プランを提案しており、価格は被災者のニーズを踏まえて、1,100万円~2,000万円と限りなく安価に抑えた。

未だ被災地の住宅再建への土地の確保が難しく建設まで至っていないのが現状であるが、本年3月には2棟目の引き渡しを完了し、3棟目の建設に着手している。

今後住宅着工戸数は年々増加すると思われるが、森林整備(間伐)作業を進めながら被災者ニーズに応え地域森林環境保全の担い手として努力していきたい。

(たかはし ゆきお)